

## 2020年1月NHK九州沖縄地方放送番組審議会

1月のNHK九州沖縄地方放送番組審議会は、16日（木）、NHK福岡放送局において、7人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず事前に視聴した小さな旅「“くわーどう宝”の海～鹿児島県 徳之島～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、2月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

### （出席委員）

委員長	山元 紀子	（霧島高原ビール（株） 代表取締役）
副委員長	長崎 健一	（（株）長崎書店 代表取締役社長）
委員	乾 眞寛	（福岡大学 スポーツ科学部教授）
	大鋸 あゆり	（伊万里ケーブルテレビジョン（株） 取締役放送部長）
	関西 剛康	（南九州大学 環境園芸学部教授）
	田川 大介	（（株）西日本新聞社編集局総務）
	富田 めぐみ	（南九州大学 環境園芸学部教授）

### （主な発言）

<小さな旅「“くわーどう宝”の海～鹿児島県 徳之島～>

（総合 10月27日（日）放送）について>

- 「小さな旅」は初めて視聴した。徳之島ならではの豊かな自然と、伝統の追い込み漁や、奄美の方言である島口を伝えていきたいという宮田正行さんと子どもたち、闘牛に打ち込む直涼菜さんの思いと姿が、25分という時間の中にバランスよく構成されていた。視聴後にとても温かな余韻が残る番組だったと思う。冒頭のナレーションで、徳之島の地理を紹介していたが、島の人口などの情報も少し入っていれば、視聴者には徳之島の規模がよりイメージしやすかったのではないだろうか。番組後半では、闘牛に打ち込む涼菜さんが、飼っている牛のチビブルと深い絆を築いているということが、彼女の部屋の写真やキーホルダーの映像を通して伝わってきた。彼女自身の純朴な人柄が伝わってくるにつれ共感が生まれてきて、試合に勝利した瞬間に涼菜さんが拳を突き上げてチビブルを抱きしめたところは最高のシーンで、わが事のようにうれしさが込み上げてきて、涙が出た。旅人の山田敦子さんのナレーションがすばらしく、番組にあっていた。テーマ曲やタイトルの文字など、

言いようのない懐かしさが感じられ、視聴後にとってもよい余韻を与えてくれた。

- 自然体の番組づくりがよかったと思う。番組の冒頭で山田さんが正行さんに話を聞く場面は、偶然出会ったかのように見せていたが、もう少し自然体で話をしてもらえばよかったと思った。タイトルは、「くわーどう宝（子は宝）」だったが、子どもの話というよりは、子どもを宝とする親の話、島の人たちの生き方を描いた番組と捉えて視聴した。正行さんが9人の子どもに方言や追い込み漁、島の文化を必死で伝えようとしているのに、子どもたちはそこまで強い関心がないのが映像から伝わってきたが、そこで無理に引き出したようなコメントがないのに好感が持てた。その後、「お父さんは何でもできる人、何でもできる人」と、自然に2回続けて出てきた言葉には大変真実味があって、本当に尊敬しているということが伝わってきた。番組全体として、自然な演出をしていたからこそ引き出された言葉だと思う。番組後半の闘牛を育てる涼菜さんについても、闘牛のシーンでは過剰に実況で盛り上げるというのがなく、非常に好感が持てた。オープニングの映像でカップルが登場しており、男性が何かを海にまいているように見えた。本編で出てくると見ていたが、結局そのカップルは最後まで出てこなかったのが、男性は何をしていたのか、細かいことではあるが気になってしまった。
- 海の中の映像や空撮は本当にきれいで圧巻だったが、オープニングのカップルの映像と旅人の登場シーンは、少し違和感があった。タイトルの意味が、方言なので十分に理解できなかったのが、主役が海なのだろうと思って見たが、子どもの話だったので、少しわかりづらかった。見終わったときに、何が一番伝えたかったのだろうかと思った。海が主役なのか、人が主役なのか、どちらだったのだろうか。また、子どもたちはごく自然にホテルの仕事の手伝いをしているのではないと思うが、そのような場面があれば、いっそうよかったと思う。後半の闘牛のパートは、少女と闘牛という組み合わせが衝撃的で引き込まれた。闘うシーンは迫力があり、逆転する様子は何の解説もいらなくて、非常に熱いものを感じた。涼菜さんが牛の背中に抱きついている場面が非常によかったと思う。島でふれあった人の物語だったが、正行さんの子どもたちは尊敬するお父さんの思いを引き継いでいこうとしているのか、涼菜さんがこのあと島を離れてどう過ごしていくのか、島がこれからどうなっていくのかなど、心配にもなった。
- 「小さな旅」は見たことがなく、どのような番組なのかと思って見た。オープニングにカップルの映像が出てきたがこの映像はいらなかったと思う。山田さんが旅をしながら番組が進んでいくと思っていたが、正行さんと話す場面の演出が少し不自然だった。番組の後半で、山田さんが砂浜を歩いていると牛を連れた涼菜さんが

出てくる場面があったが、闘牛が海とどういうつながりがあるのかというのは、番組を最後まで見てもよくわからなかった。闘牛の場面は非常に感動した。涼菜さんの屈託のない、チビブルを愛している姿が画面から伝わってきた。勝ったときに牛の背中に乗って喜ぶシーンも、本当にうれしいというのが伝わってきて、すばらしかった。気になった点は番組構成が、タイトルと合っていなかったことである。恐らくタイトルありきで、制作途中でいろいろと内容を構成したのではないかと思った。最後までタイトルの中の「海」というのが引っかかってしまった。番組内容はすばらしかったので、なるべくそうした引っかかりは減らしてほしいと思った。

- 「小さな旅」は何度か見たことがあるが、意識して見たことはなかった。非常に安心して見続けることができる番組だと思った。サンゴの海をはじめとする美しい徳之島の自然、そこに生きる人、島特有の追い込み漁や闘牛、そうした人々の営み、日常を自然に描いており、タイトルの「小さな旅」を、映像を通して体験することができた。1人の旅人として、通りすがりの人がじっと風景を見るように、繰り返し広げられていく映像を見ていく、落ちついた、安心できる番組だと思った。闘牛についてはもう少し説明があってもいいと感じた。400年前から続く闘牛という説明はあったが、徳之島の一つの大きな文化であり、とてもにぎやかになる終盤の熱狂的なシーンなどがもう少し盛り込まれていると、理解が促されたのではないかと感じた。
- 番組の意図は非常によく伝わってきたと思う。この番組は、日曜日の朝に食事をしながらよく見るが、昔からこのテーマ曲は変わらずに流れており、とても安心感がある。今回も徳之島の魅力とそこに住んでいる人の魅力が完璧にまとめられており、長寿番組の貫禄を感じた。海の魅力は海中にすむ生き物の美しさが伝わってきた。追い込み漁の海中の映像も、とてもわかりやすく、映像だけでよくわかった。人間模様の見せ方も、いつもながら秀逸だと思った。追い込み漁のあとに敬太君が発した、「緊張していたけど、お父さんを見ていたから楽しくできた」、「お父さんは何でもできる人」ということばは、お父さんの魅力を物語っていたと思う。闘牛の話では、「手塩にかけて育てた牛が勝ったときが何よりの喜び」や、「悩んでいるときには牛が寄り添ってくれる」といったことばが少し独特で違和感があったが、人と牛のつながりが強い島ということが想像できた。チビブルが勝って、涼菜さんが牛に抱きつくシーンも、感動的なシーンだった。気になったのは、涼菜さんが牛を海で散歩させている場面で、「海は大切な場所です」というひと言があったが、急に海の話が入ってきたのが唐突で違和感があった。番組全体を通して、よけいなテロップも入らず、ナレーションも現場の音と映像を補足する程度にとどまっていた、最後まで番組に集中することができた。ディレクターが事前に取材した内容を旅人が

どの程度把握して現地に入っているのだろうか、私もいつも気になっていたが、山田さんは正行さんと会って、自然に会話に入っていたので、違和感なく見ることができた。

- 世界自然遺産の候補地になり、盛り上がりを見せているときに、行ってみたいという気が起きる番組だった。昔は島の人たちのことばには必ずテロップが出ていたように思うが、今回はテロップがなくても会話の内容が伝わり、いまは島の子どもたちのことばも変わってきたと感じた。闘牛の場面では、少女が世話をしているというギャップが魅力的で、涼菜さんだけでも番組が作れるのではないかと思った。気になったのは、「ビッグダディ」ということばを使っていたが、これは民放の番組で使われていることばでもあり、違和感があった。今回の番組では父親に焦点をあてていたが、9人の子どもを産んで育てているお母さんについても見てみたいと感じた。

(NHK側)

「ビッグダディ」ということばについては、番組モニターからも同じ意見があり、その表現は使わなくてもよかったと思う。今回の番組では、闘牛の話題をどう取り上げるかという点が一番悩んだ。昔は賭け事の対象であったということや、スペインの闘牛のように牛が死んでしまうのではないかという印象を持つ人もいることから、淡々と伝えることを心がけた。その一方で、説明が足りなくなってしまった点があったかもしれない。意見を聞いて、闘牛について一定程度の説明が必要だったと感じた。また、前半部分と後半部分で大きく話が変わったので、同じタイトルで結びつけるのは少し無理があったかもしれない。

- 海岸を歩く旅人の山田さんの服装には違和感があった。つばの広い帽子、ジャンパー、リュックサック、スニーカー姿は、徳之島の雰囲気からは離れていた。もっと楽しんでビーチを歩いているような映像でよかったのではないか。冒頭の海岸で偶然出会った漁師さんとのシーンは必要ないと思った。この番組はアナウンサーの語りと映像だけで十分であると感じた。家族が淡々と描かれているのもいいと思う。後半の涼菜さんとチビブルとの関係は、愛情深い感じが感じ取れた。闘牛のシーンには思わず目をそむけてしまったが、勝負に勝ち、チビブルに駆け寄り、乗った姿は心に響いた。いつも通りの心がほっとする番組だった。自然と人間との関わり合いの様子をこれからも淡々と取材して欲しい。

- オープニングの映像がきれいだった。サンゴの海、アオウミガメ、イソギンチャクの映像と美しい音楽とナレーションが非常に合っていた。追い込み漁の時も海中がきれいだった。自然の描写こそ、現場で取れた本物の映像だと思う。追い込み漁の場面では、家族の連携と逃げる魚を追い込むシーンがふかんに映像に収められており、さらにバックの音楽と合っていた。漁が成功した後の場面は、父親の正行さんが子どもに伝えたい思いがしっかりとわかる場面だった。
- タイトルを「子は宝」ではなく「くわーどう宝」とすることで、生身の人のぬくもりを感じることができ、ストーリーに期待を持てるいいタイトルだと思った。出演者はどの人もとてもすてきだった。素朴で人間味があり、このような人たちに触れ合える徳之島を旅すると、一気に徳之島を好きになると思った。とてもいい番組だった。私は、この番組の登場人物と自分を置きかえて考えることはできなかったが、正行さんのような40代の父親では共感できた人もいると思う。番組内で「ビッグダディ」ということばを使っていたが、これはイメージが違った。4男の敬太さんの「お父さんはなんでもできる人」ということばが心にしみた。そのあとのナレーションは不要ではないかと思った。今回は、母親の登場が少なかったので、女性である山田さんの視点で、父親と子どもとの関係が明らかになるようなことばがあってもよかったのではないかと思った。

(NHK側)

番組の視点が少し違うのではないかという意見があったが、結局は何が一番伝えたかったのかという話に行き着くと思う。取材の中でさまざまな事実と出会い、伝えたいことが当初考えていたものから変わってくるのは十分あり得ることだが、制作側が伝えたいことをしっかり確認しながら番組を作っていくないと、最終的に何だったのかと視聴者から指摘されてしまうことになると思う。このようなことも考慮に入れて番組作りをしていきたい。

<放送番組一般について>

- 12月6日(金)の「あさいち」を見た。この日の投稿募集のテーマが「ご自身の母から言ってもらって、忘れられない一言」だったのだが、「昔、母親に言われた『あなたは幸せになれない』という言葉がのろいの言葉として、今でも残っている」という1枚のファクシミリが紹介されていた。コーナーが終わりそうなタイミングで、キャスターの博多大吉さんがいったん進行を止めて、「先ほどの方、今日番組で、こ

のお便りが紹介されたということで、呪いは解けたということで幸せになってください」とコメントをしていた。毎日しっかりと番組を進行している大吉さんが、進行を止めてまで発した一言に、すごさや大きな優しさを感じた。この一言でファクシミリを送った人は救われたと思う。同じような境遇にある友人と偶然この話題になったのだが、友人もこの番組を見て救われたようで、表情が晴れ晴れとしていた。メディアにはこのような人を救う力もあるのだと強く感じた。

- 12月27日(金)の「陽水の50年～5人の表現者が語る井上陽水～」(総合 後10:00～11:15)を見た。歴史を語るようなかたいまとめ方をすると思っていたが、5人の表現者がそれぞれの語り口で陽水さんのエピソードを話しており、とてもおもしろかった。番組で紹介された曲も、昭和、平成、令和の時代を映しながら、時代によって曲が大きく変化しており、陽水さんのすごさを感じた。セットも少し暗めのスタジオで、光と音楽の演出がすばらしかった。NHKの音楽番組も変わってきていると思い、新鮮に感じた。
- 12月31日(火)の第70回紅白歌合戦「夢を歌おう」(総合 後7:15～11:45)を見た。大みそかに仕事納めをして家族で紅白や「ゆく年くる年」を見るのが何よりの楽しみなのだが、今回は久しぶりに最初から最後まで視聴した。東京オリンピック・パラリンピックが目前に迫る中で、かつてのNHKのオリンピック放送テーマソングの数々から嵐の新しいテーマソング「カイト」につなげる構成に、NHKの打ち出したかったコンセプトを強く感じた。子どもに人気の「おしりたんてい」も登場しており、家族全体で楽しめるような番組になっていた。ただ、全体としては少し内容を詰め込みすぎており、番組進行が慌ただしい感じがした。番組の中で、一番違和感を抱いたのは、AIの美空ひばりさんの場面だった。生前、存在していなかった歌を、本人が歌っているかのように見せるというのが、少しふに落ちないところがあり、どう理解していいのかわからず戸惑いを感じた。唐突に感じる人もいたのではないかと。その曲を制作して放送することの意義を相当丁寧に説明しないと、ファンの理解や納得は得られないと思う。紅白はその時代を映しつつも、全世代が安心して視聴ができて、年越しの時間をともに過ごせる番組であって欲しい。今回のAIプロジェクトそのものを否定するわけではないが、このような実験的な取り組みは、別の独立した番組で十分だったのではないだろうか。
- 1月2日(木)の「新春テレビ放談2020」(総合 後10:00～11:15)を見た。NHKだけではなく民放テレビ局関係者や、コンテンツ制作関係者の方が、民放のTVドラマやWEBドラマについて真剣に議論しており驚いた。制作者側と視聴者側の

意見が交互に出ていたので、私も見ていて引き込まれた。特にテレビや WEB ドラマに詳しい民放テレビ局の佐久間宣行プロデューサーの存在がよかったと思う。全体としては熱意のあるスタジオトークとスムーズな司会進行や視聴者アンケートなど、しっかりとした番組で納得感が高かった。このような番組があれば定期的に見たいと思った。

- 1月6日(月)のストーリーズ「ふたりの“最期の七日間”」(総合 後 10:50~11:20)を見た。52年間連れ添った夫婦の愛情、病床で命が尽きようとする中で、夫や家族、子や孫たちに贈る女性の優しいメッセージ、妻を亡くした夫の悲しみ、そうした情感が映像の中からしみじみと伝わってくる、心を揺さぶられる番組だった。年末年始、家族で集まってともに過ごした多くの人が、仕事始めの日常に戻っていくその日の夜、この番組を見た人が、家族とは何だろう、夫婦とは、生きるとは、病むとは、さまざまなことを思いめぐらすことができたのではないかと思った。優木まおみさんのナレーションもよかったと思う。
- 1月10日(金)の実感ドドド!「アスリート放談“スポーツのチカラ”を語ろう!」を見た。出演者がトップアスリートの方たちなので、個人の生き方や、成長し続けるためにはどうすればいいか、スランプに陥ったらどうすればいいのか、チーム力を高めるにはどうすればいいのか、組織づくりの話など、仕事においてもヒントになるものばかりだった。単にアスリートの話を聞くというだけの番組ではなかったので、時間があっという間に過ぎた。おもしろくてためになる番組だった。
- 1月10日(金)の金サガ「ザ・ディレクソン in 佐賀 秘密基地をつくる。」を見た。冒頭のナレーションで、新たな番組作りが始まるということがうたわれていたが、選ばれた1つのグループの企画を遂行するのを NHKが撮影して番組にしているという点では、結局は企画者のドキュメンタリーをNHKが作るというだけなので、番組としてあまり真新しさは感じなかった。もし制作まで視聴者が手がけるのであれば、より斬新な番組ができるのではないかと思った。今回は5つのグループの企画から1つが選ばれて番組が作られたが、ほかの4つの企画のアイデアもおもしろく、映像化したら素晴らしいものができるのではないかと思った。全国放送で難しいなら、地域放送でほかの4つの企画も取り上げてほしい。また、今回選ばれた企画も今後どうなるかを知りたいと思った。また、29人の県民が参加していたが、この人たちがどのように選ばれたのかが最後までわからなかった。選考のいきさつを少し入れたほうがいいのではないかと思った。

- 1月11日(土)のNHKスペシャル「認知症の第一人者が認知症になった」を見た。1年間にわたって取材した映像、また肉声に触れることができ、長谷川和夫医師の悲しみ、孤独、葛藤、それから支える家族の戸惑い、苦労がよく伝わってきた。大変だと感じる一方で、生きていく喜びにもしっかりと触れられていた。長谷川さんのことばに生への喜びを感じる事ができて、丁寧に作られた番組だと思った。SNSでもかなり反響が広がっていたようで、職場でも話題になった。ナレーターの吉岡里帆さんは、長谷川さんの年代からするとお孫さんよりも若い世代だが、若い人の語りも胸を打ち、よかったと思う。
  
- NHKスペシャル「認知症の第一人者が認知症になった」を見た。タイトルを見て、認知症医療の第一人者が認知症をどのように感じるのだろうかと思い視聴した。当事者になってみないとわからないことが、研究者にはたくさんあると思う。「余分なものははぎ取られるわけだよね。認知症になると」ということばなどは、医療の第一人者としての体験がそこに出てきており、とても重みを感じた。番組の最後にディレクターが長谷川さんに「認知症になって、どんな景色ですか」という質問をすると、「変わらない。景色は普通だ」と答えるのだが、もう少し深いことばが聞きたかった。認知症になっての人生観や考え方、医師としての考えなど、二度と聞けない話なのかもしれないのに、その質問のしかたがもったいないと感じた。また、番組の最後が、妻の瑞子さん視線のコメントで終わっていたが、タイトルが「第一人者が認知症になった」というのだから、長谷川さん本人の視点で終わったほうがよかったと思う。全体的には、長谷川さんの人間味があふれており、決して暗くない、明るさが伝わってくるよい番組だった。
  
- 認知症の方を取材するというのは、どこまで放送するかも含めて、構成の難しさなどがあったと思う。長谷川さんがデイサービスに行きたくないというのは理解できる部分もあった。家族の大変さを伝えることで、救われる人もいたと思う。
  
- 1月14日(火)の「ニュースただいま佐賀」を見た。昨年8月の佐賀豪雨で鉄工所から流れ出た油に関するの最新情報を伝えていた。油にまみれた農地の改善について、専門家の意見も交えながら問題点をとらえていた。先月の審議会では豪雨の特別番組だけを見て意見を言ったが、このように日々のニュースで放送していることがわかってよかったと思う。
  
- 12月14日(土)のETV特集「ある特攻隊員の死～祖母とたどる兄の最期～」を見た。若手の福田紗友里ディレクターが、大伯父の最期を解明していく姿を通して、忘れつつある戦争の悲惨さを思い返せる番組だった。「声にならない声を聞いて



ほしい」など、90才を超える方々から深い言葉をインタビューでひき出していた。この番組はあらためて平和の重さ、必要さを考え直させてくれたと思う。

- 1月6日(月)の100 de 名著 呉兢“貞観政要”(1)「優れたリーダーの条件」を見た。時間が25分と大変見やすかった。放送する時間帯も働いている人にとってちょうどよく、ビジネスの参考になる番組だと思った。気になったのは貞観政要を朗読するシーンでは、いすの置き方を工夫したほうがいいと思った。太宗と人民のここと、社長と社員とのことも同じであることへの気づきを促すことが大切だと思う。また、名著に囲まれているセットだが、マグカップが必要だろうか。カップには液体が入っており、こぼれたりすることを想定すると違和感があった。セットも含めて番組の視聴者に伝わる要素であり、少しでも違和感があれば気になってしまうものである。
- 先日、おはよう日本を見ていたら、スポーツコーナーの時に画面右側に2次元バーコードが出ていた。大相撲の取組の動画が見られるということで、いよいよ放送と連携し通信でも動画を見る時代になったのだと思い、このように放送は変わっていくのだろうと感じた。
- 大河ドラマ「いだてん」には、さまざまな意見があると思うが、私はこれまでの大河ドラマにもあてはまらないスタイルで、傑作だったと思う。主人公が2人いて、さらに周りのキャラクターたちが大変個性的で、ストーリーも時系列ではなく時代が行ったり来たりしており、現実と落語の話が交錯したりと、複雑ではあった。そうした大河ドラマだからこそ描けた深いドラマだったと思う。テーマである平和の祭典・オリンピックは、実際には戦争や政治によって翻弄されてきたことが描かれていた。今年のオリンピックや現代への戒め、強烈なアンチテーゼのように感じたシーンやせりふが多くあり、心に残るものがたくさんあった。テレビは視聴率も大事だと思うが、あまり重視しすぎると単純で誰にでもわかりやすく届く番組ばかりが世にあふれる懸念がある。誰もが好きな、楽しい、明るい、ハッピーなエピソードばかりではなく、少し目を背けたくなるような戦争の話や権力や差別、過ちなどを大河ドラマでぎりぎりの挑戦をしながら描ききったこと、最後まで脚本の宮藤官九郎さんの世界観を守ったこと、視聴者に届くと信じて最後まで放送したことに敬意を表したいと思う。

NHK福岡放送局  
番組審議会事務局